

第二十七回法華經・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナー

仏教者の社会的役割——高度専門職の立場から

袁 輪 顕 量

はじめに

最近、高度専門職という言葉が、だいぶ市民権を得てきていると思います。最初の大きなうねりみたいなものが起きたのは、二〇〇〇年代の最初ぐらいだったと思います。皆さんも、いろんなところで聞いたことはあるのではないかと思います。ロースクールができ上がるときに、この高度専門職という言葉が注目されるようになりました。

その頃に変に話題になりました高度専門職とは、どういうものでしょうか。実は、高度専門職の元の言葉というのは、英語から来ていまして、プロフェッショナルが語源だと言われています。そのプロフェッショナルの教育というのがどういうものなのか、またプロフェッショナルと言われた仕事というのが、現実はどういうものであったのかというところから、話をしていきたいと考えております。

高度専門職と大学の起源

高度専門職というのに対しまして、普通の専門職というものもありますが、現代社会においては、多くの分野

が高度化しまして、いろんな職業が高度な専門職と呼べるのではないかと思います。その一番典型的なものは何であったかといえますと、実はヨーロッパやアメリカの世界から始まっていくのですが、宗教者即ち神父さん、それから次が法律家、いわゆる弁護士さん、そして医者さん、これは、最初は内科医だったと言われていますが、これらの三つが西洋世界におけるプロフェッショナルの代表でした。

その起源がいつぐらいかといえますと、西洋世界の中世の時代から始まると考えることができます。その最初に当たるものが、ヨーロッパ世界に成立します。それは大学ができてくるのと一致します。大学というのは、どういうところから始まったのかということが議論されることがあるのですが、大学は英語でカレッジだとか、ユニヴァーシティとか言われますね。ヨーロッパに最初にでき上がりました大学は、イタリアとか、フランスなどにおいて登場したとされます。パリ大学も早いですし、ナポリ大学やローマ大学とかも結構、早いです。

その大学が、どういう目的を持っていたかといえますと、実は、ユニヴァーシティというのはウヌム・ベルトゥというラテン語から発生したのではないかと言われていまして、ウヌム・ベルトゥは、一つの目的というように訳されることです。大学といえますと、ユニヴァーシティということは皆様、よくご存じですよ、また、ユニバー스는宇宙というように訳されたりしますので、総合的な大学がユニヴァーシティと思いますが、語源的には若干、異なるようです。ウヌム・ベルトゥというラテン語から考えていきますと、わかりやすいと思いますが、それは、一つの目的をもつ場所、という意味でした。その一つの目的は何であったかといえますと、実は、真理を探究することでありました。

ヨーロッパ世界における学問の場といえますか、学びの場というのは、中世によって突然に登場したわけではなく、古代から存在していました。最初の学びの場というのは、ギリシャ世界から始まったと言われています。皆さん、よくご存じのソクラテス、プラトン、アリストテレスという人たちがいますが、彼らが学問の最初として登場します。

彼らが生み出していった哲学というのは、様々な知を愛することだと言われます。人として生きてくうえでの様々な疑問とか、あるいはこの世界の始まりが何であつたのだろうかなどといったことを真剣に考える場ができていきました。この知の営みが、今、私たちが哲学と呼んでいるものとしてでき上がっています。その最初期はソクラテスで、やがてプラトンに継承され、アリストテレスで大きな繁栄期を迎えます。プラトンのときにでき上がった学院として、アカデメイアというものが存在していますが、これが恐らく、ヨーロッパ世界の学びの場の一番の原形になるのではないかと思います。

そこでは何が教えられたかといいますと、知識や技術の習得が教えられていたと言われます。哲学の世界ですから、様々な知的な知識を身につけていく、これが教育の最初になったと言われています。実はこれは、ヨーロッパ世界の伝統の中で起きたことでありまして、東アジア世界におきましては、少し異なつたところから発生します。

東アジア世界の学びの場

東アジア世界では学び舎、学校というのは、一体どこから起きたのかと考えていきますと、全然違うところから起きている。東アジア世界におきまして、最初の学び舎は、紀元前の五、六世紀ぐらいまで遡っていいと思うのですが、孔子が登場して、自分たちの子弟を育成するようになったところから始まります。当時、学校という言葉はまだなく、^{しやう}庠とか、序と言われるのですが、この「庠」とか「序」という場、これが学び舎でした。儒教の学び舎が、東アジア世界の最初の教育の出発点になります。

儒教の中では何を教えるかといいますと、人間のあるべき姿、いわば人倫の道を教えます。ですから、東アジア世界ですと、学び舎というのは、人倫の道、いわば人間の道徳を学ぶところが、学び舎の最初だと考えられました。この伝統は、東アジア世界において、後代にまで継承されまして、現在でも、日本の教育基本法の冒頭部分に、「人間

の人格の完成を目指す」ということが書かれていますが、これは実は、東アジア世界の文化的な伝統だと思います。

これに対して、知識や技術を習得するものが学校の始まりだと考えたヨーロッパやアメリカですと、学校に期待するのは、知識や技術の習得です。日本の現代の状況はどうかといえますと、その両方を学校教育の中に求める状況になっていないかと思うのです。少々話が脱線してしまいましたが、その学び舎のもっとも高等な教育機関として登場します大学の最初は、十二世紀にあったと言われています。

大学の祖と言われる方は、アベラールという方です。この方が、真理の探究という点で、大変に重要な場を作るようになりました。それは教会の権威だとか、あるいは国王だとかの支配下に設立された学び舎とは全く別の、自ら真理を探究し、何が本当に正しいのかを追究する場であったと言われます。これが大学なのですが、そのような目的をもって作られた機関が、今で言うところのユニヴァーシティになっていきました。

大学での修学・リベラルアーツ

さて、ヨーロッパの大学で最初に学ばれたものは何かといえますと、自由七科と言われるものでした。文法学・修辞学・論理学の三学と、算術・幾何・天文学・音楽の四科が学ばれて、これは特に職業に関係するわけではないのですけども、このような科目の修得の上に、職業に関連する学びをするというような制度を作り上げていきます。今、申し上げました七つが、いわゆるリベラルアーツという名前前で呼ばれるものでして、これが欧州の、中世から近世、近代に掛けて、人が持つべき必要があると判断された技芸で、一番の基本になるのだと考えられました。その上に高度な職業的な知識が乗っかるのだと位置づけられました。

この七つの学問が、人間をよい意味で解放するものだと言われました。日本では教養科目などと訳されたりしますが、本来の役割から考えて、このリベラルアーツと言われているものは、人間として必要なものだという点から考え

れば、若干、異なったものと考えざるをえないように思います。

このようなリベラルアーツを学んだ上に乗っかる高度な職業とされたものが神父、法律家、弁護士、それから医者、内科医です。実は外科医は、この高度な専門職には入れられていなかったようです。これらのための教育というのが、自由七科を学んだうえで、その上の高等教育機関である大学院で施されるというような感じになります。ここで神学、法学、医学というようなものが学ばれます。これらが高度専門職の最初になりました。つまり、ヨーロッパ世界におきましては、神父は、要は宗教者ですが、高度な専門職者の一番の代表と考えられました。そのための教育のシステムが、出来上がってきます。具体的には何かといえますと、先に述べました自由七科プラス専門的な職業に関する学びです。その背景に存在していたのは、実は古代のギリシャの伝統と、ヨーロッパ世界に大きな影響を与えたキリスト教世界の伝統でした。

具体的な教育方針が、一体どのようなものであったかといえますと、参考になるものをインターネットで調べましたら、出てきました。桜美林大学のリベラルアーツ教育というのが結構、評判を集めていまして、その定義が分かりやすいと思われましたので、引用させていただきました。「幅広い総合的な知識、高度な専門性、的確な判断力と実行力を持つ人材が求められます。このため、従来からのある程度狭い領域で、一つのことを中心に学ぶような単線型専門教育では対応できません。」単線型専門教育という言い方が出てきていますが、実は日本の学問伝統の中では、この単線型の教育がずっと継承されてきています。今、私が在籍しております東京大学でも、基本的にはこの単線型だと思っています。学部での教育専門課程に入っていくとして、その延長線上で大学院を考えています。ヨーロッパのような大学院の勉強は、学部で幅広く学んで、そのうえで専門を積み上げていくというタイプのものとは、違ったものが現在行われています。

これが今の新制の大学の実態です。とはいえ、学部の三年生から専門教育になりますので、一、二年生はいわゆる

リベラルアーツです。現在の日本ですと、教養教育と呼ばれていますが、それを学んだうえで専門に行くというので、基本的な発想は変わらないのですが、でも、大学の学部に入ってしまうと、単線型になってきています。

最近では、これが少し変わりつつあります。やはり教育のシステムとして、現代社会に対応しにくくなっているのではないかという意見もあり、副専攻を持たせるべきではないかという話も出てはいるのですが、実現の見込みは立っていません。

桜美林大学が、リベラルアーツでなぜ有名になっているかといいますと、実は、ロースクール等の専門職大学院大学を作るときに、文科省の中で活躍した先生がいらっしゃるからだと思います。文科省の役人さんではないのですが、大学の先生で、この制度の制定の時に活躍した人の何人かが、この桜美林大学に今、いらっしゃるのです。そんな関係で、この桜美林大学は、リベラルアーツ教育で有名なところになっています。

高度専門職の教育方法

教育の方法は、ベダゴジーという名前で呼ばれるものと、アンドラゴジーという名前で呼ばれるものの二つがあるのですが、アンドラゴジーがふさわしいという言い方がされています。ベダゴジーは教授教育、アンドラゴジーは自己教育というように翻訳されます。成人の教育は、このアンドラゴジーというやり方がふさわしいと言うのです。でも、アンドラゴジーって何だという感じになります。実態は自分で学ぶものです。教授教育と自己教育という言い方、教授教育は多分すぐ分かると思うのですが、これは普通に先生がいて、先生から講義形式でお話を伺って、学んでいくものが教授教育です。では、自己教育といえ、教育というのは、やはり誰かから教わる、というような感覚で理解している方が多いと思いますので、自己教育というと、何かちょっと語義矛盾のような感じがしてしまう印象がありますね。でも、この自己教育は、基本的には自らが学んでいくという点を強調して、自己教育というように呼

んでいるだけです。

この学びのときの一番の基本は何かといいますと、ケース・スタディー、事例研究を中心にするのが大切だと言われます。その事例研究の中で一番の標語としてよく出されるのが、「発見」、「追求」、「解決」です。もう少し詳しく言いますと、問題発見と本質追究と自己解決というような言い方がされます。ちなみに、このアンドラゴジーというのは、アンドラゴギーというように読ませるべきだと思いますが、一般にアンドラゴジーと呼ばれていまして、アメリカにおける成人教育の理論家であるマルコス・ノールズという方が、結構早い時期に提唱したものです。そして、成人教育における主要な概念として発展したものと言われています。ギリシャ語の成人教育を意味する言葉から発想されたということを、普通の教育と区別して使うというようなことがあったのですが、現在では、ベダゴジーもアンドラゴジーも、その境界領域が曖昧になってきていまして、どの点を強調するかぐらいの相違ではないかと思います。

ただ、このアンドラゴジーの特徴というのは、成人は、自分たちが学ぶことについて、その計画と評価に直接関わる必要があります。自己概念と学習への動機づけ、失敗も含めた経験が学習活動の基盤を提供してくれる、そのような経験が大切にされます。成人は、自分たちの職業や暮らしに直接重要と思われるようなテーマについて学ぶことに最も興味を示します。成人の学習は、学習内容中心型ではなく、問題中心型です。現在の教育改革の中で進んでいるものは、この問題中心型でありまして、大きな教育の流れのようなものが、今、教授教育型から自己教育型に流れているような印象を受けるところがあります。『成人教育の現代の実践―ベダゴジーからアンドラゴジーへ』というような本が出されていて、この本なんかは、随分影響を与えたものと言っていると思います。

では、推奨される在り方というのは、一般的な了解として、現実生活の中に潜む問題点を自ら発見し、その原因を自ら追求して、そして自ら解決する、問題解決型の教育が望ましいと言っていると思います。

ソクラテス、プラトン、アリストテレスの三人の彫像が、実はヨーロッパ世界に行きますと、結構残っているところがあります。昨年の秋にイタリアに出張する機会があったのですが、イタリアというのは、ローマの文化が、ほんとに現在まで残っているというのをすごく実感しました。ローマの文化は、基本的にギリシャの文化に依存しているところがあります。ギリシャ時代のものが模倣されて、ローマの時代にたくさん作られて、それが現代にまで継承されているそうです。かつキリスト教が、深く社会の中に、隅々にまで行き渡っているのだということも、実感いたしました。

日本における高度専門職の発足

話を元に戻して、日本における制度としての高度専門職の養成について話をしたいと思います。これは今、法科大学院という形で現実化していますけども、今、いろいろと取り沙汰されているところです。日本の社会の中で、高度専門職が意識されて、その養成に国が直接に関わることが叫ばれて、現実動き始めたのは、わずか十数年前です。制度として出発したのは二〇〇四年ですから、わずかに十四、五年前からです。

日本における最初の高度専門職者の養成機関は、ロースクール、法科大学院でした。この法科大学院が作られるときに、何が一番問題になったかといいますと、実は東京大学が問題になりました。どういう点が問題であったかといいますと、東京大学は、明治に初めて官立の大学として作られましたが、最初に、社会にとって重要な職業者を輩出しようと、それも専門家を育てようということで始まりました。社会にとって一番重要な職業、切実な問題は、一つは、誰もが病気になるからです、お医者さんですね、それからもう一つ、社会ができてくると、争い事も起きてきますから、様々なルールを作っていかなければいけませんね、ですから法律の専門家を作らなければいけないということ、東京大学が設立されたとき、一番の重要な学部として設置されたものは、医学部と法学部でした。その

あと文学部と工学部が作られました。

東京大学は、四つの学部でしばらく継承されるのですが、このときに、実は法学部や文学部の学生総数と、工学部の学生総数を比べてみますと、工学部は、法文系の学部の何と倍以上の方が受け入れられました。これは、明治新政府の殖産興業、富国強兵と密接に連動していたかと思うのですが、工学を重視するという方針が立てられていました。工学部の学生さんがとても多かったというのが、興味深いところです。いずれにしましても、看板として作られたのは、医学部と法学部です。その法学部の学生さんの過半数が、法曹界に入っていくという伝統が、永らく続きました。法律家になる人と政府のお役人さんになる人が、東大の法学部から輩出されていたのですが、これが一九八〇年代、もう少し前ぐらいからでしょうか、法学部の卒業生の半分近くが民間企業に勤めてしまうという事態が生じてきます。私の学生時代にも、すでにそのような傾向が強くて、学生さんの半分以上は、一般の企業に出ていました。ですから国の方にしても、東京大学にしても、本来の役割として、法学部の学生さんたちには、官僚になっていただくか、法曹界に入っていたら社会のために尽くしてほしいと思っていたはずなのですが、現実には、経済的な利潤が上げられる一般企業に入る人が、かなり増えてしまっていたのです。

こういう状況を改善したいという動きが、実は国の内部にあったようです。言ってみれば、東京大学の法学部を体系的に再出発させたいというようなところから、法曹界の専門職者を育てるための高度専門職の大学院ですが、それを作ろうという話が動き始めたというのです。このときに、背景にあった考え方が、職の専門と認識の専門を分ける考え方です。高度な専門職として、職の専門家を目指す人と、研究の専門を目指す人、この二つには、明らかに違いがあるということが主張されました。職の専門を養成するための教育体系というのは、研究の専門者を作り上げる教育体系と異なるのではないかということが主張されました。この職の専門と研究の専門を分けるべきだということを、いち早く主張した先生がおられました。それが東大の教育学部にいらっしやいました持田栄一先生です。この考え方

を、一九七〇年代頃には主張してらっしゃったそうです。

実は、この持田栄一さんのお弟子さんたちが、高度専門職の大学院制度を作り上げていくときに活躍しました。在野の方になります。文部科学省の中に、審議会といいますか、委員会ができるのですが、そこに参考人みたいな感じで二人入られたのですけれども、この二人の方が、実は推進役になりまして、高度専門職の大学院大学という制度を作る方向に動いていきました。どなたかといいますと、名前を挙げると差し障りがあるかもしれませんが、一人は高梨俊毅先生という方で、もう一方は館昭先生という方です。この館先生が今、桜美林大学で活躍しています。高梨先生は、千葉県の県立の衛生大学の先生でいらっしゃいました。先生は看護教育の中で頑張られていらっしゃいました。このお二方が、持田栄一先生のお弟子さんであり、持田先生が描いていた職の専門と研究の専門というものが、日本の教育制度の中ではきちんと分けられていない。これが将来、必ず問題になるだろうという意識を、一九七〇年代です、言っていたそうなのですが、それを継承する形で、高度専門職の大学院大学が設立されるという方向に動いていきます。

職の専門は高度専門職者で、認識の専門が研究者です。これ、実は東京大学の中でも、大学院の改革というのが、一九八〇年代の後半から九〇年代に起きるのですが、このときに、東大の中でも議論されたそうです。私の先生から聞いた話ですけれども、東大は、やはり研究者を育てていく、研究の専門の大学として存在していくべきではないかという意見が多く、その方向を選んだということを開かされました。それに対して、東大の使命として、職の専門を育てていくのも重要であることも確認されて、特に法学部と医学部は、法律家とお医者さんを育てていくのが当初からの使命ですので、結局、両方併せ持ったというように言っておられました。

養成のための方法論

さて、養成のための方法論ですが、実は、研究の教員と実務の教員の二つに分けると言うことが行われました。研究教員は七割、実務教員は三割という形で始まります。

次の世代の教育に、現場の優秀な高度専門職者の方々にも関わってもらおうという方針が立てられました。それはなぜかといいますと、現場でしか得られない体験知・臨床知の世界を重視したからです。これは、宗教の現場というのでしょうか、私たちが実際様々な事例に接して、その中で悩み、苦しんでと言う言い過ぎかもしれませんが、悩んだ中から、いろいろと見付け出していく体験の知のようなものが存在しています。この知というのは、実は大変に重要なものでありまして、私たちは、資料の上から得られる知だけではなくて、実際の自分たちの体験の中から得られるものもあって、それは、現場でしか見付けることができません。研究者は、その現場で活躍している人たちから意見を聴いて、それをまとめていくという仕事には長けていますけれども、実際の現場に身を置いて、そこで何らかの知を得ていくというのは、研究者にとってはできないことです。これは本当に、職の専門者でなければ、見い出せないところだと思っています。

そのときの大事な点は何かという点、疑問に思うことがあったら、何か変だなと思うことです。そして、なぜ変だと感じたのか、それを温めて、心の片隅に置いておいて、常日頃過ごしていけば、その理由が自然と見つかってきます。ですから、変だなと思うことが、いわゆる問題発見につながります。その問題発見から始まって、それをなぜそういうように感じたのだろうかということを温め続けながら、いろいろな事例に接していくうちに見えてくる世界があります。これが、本質を追究することになるわけですね。見えてくれば、その結果として、どうすればいいのか、解決策も自ずと見つかってまいります。ですので、事例研究を中心として、現場でしか得られない体験知の世界を明

らかにしていくことが、実は高度専門職者にしかできない大事な点だと思います。この学びのスタイルが、高度専門職の典型になります。ポイントは、ケース・スタディー、事例研究にあります。実際に様々な状況に接している現場が、学びの場だというわけです。

この事例研究というのは、少し堅苦しい言い方をすると、「すべての事象を網羅することができない場合に一つまたは複数の事例を取り上げて、推論が当てはまっているか、傾向が確認できるかを確かめる」と、こんなように言われてしまうと、少し問題があるのですが、「人文科学でも、すべての事象を網羅することができない場合に、一つまたは複数の事例を取り上げて、ある仮説が成り立たないことを示す場合には」云々なんてことが言われていますが、事例を対象にして、そこから見えてくる世界というものを大事にしましょうということが出来ます。

これは、実は看護の世界でよく言われるのですが、質的アプローチと量的アプローチというものがあって、そのうちの質的アプローチになります。この質的アプローチが課題解決型の学習だとも言われます。問題発見がまず大事で、そこから体験の中で次第に見えてくる世界を明らかにし、それを言葉化して、多くの人に共有できる財産にしていくこと、これがとても大事です。最初は現場で見えてくる世界がありますから、それを温めながら、言葉化していく。自分の言葉で、きちんとそれを語れるようにする。そうしますと、その世界で一緒に働いている人たちが共有できる財産になっていきます。ですので、まず学びの場は、わたしたちが普段接している様々な事例です。そこから疑問に思ったことを温めていって、そしていろいろな例に接していくうちに、自然と見えてくる世界が出てきて、そこで見付け出したものを自分の言葉できちっと語る。そうすると、これは多くの人たちに役に立つ財産になっていきます。

このようなわけで、学びの標語として、法律や医療や看護の現場では、「問題発見、本質追究、自己解決」がよく言われます。この言葉は今、いろんなところで使われていますが、たとえば人文系の場合にも、問題発見や本質追究、

自己解決のケース・スタディーが中心にという方向に動いているところもあります。つまり、課題解決型の学問を、もう一度見直そうという方向に動いています。しかも、ベダゴジーではなくて、アンドラゴジーで、いわゆる成人教育の自己教育というものが大切になってきています。

現在、日本における高度専門職として挙げられているのは、法律家とか医師とか、宗教者、看護師、教員、介護士などです。ちなみに、国が責任を持つてやろうとしているのは、法律家と医師と看護師のところあたりまでです。それ以外のところは、もう民間に任せますというような感じで、動いているような気がします。ですから、宗教者の養成とか、学校の教員の養成とかは、これはもう民間というのでしょうか、特に法律で縛ることはないのです、それぞれ気がついたところは、きちんとやってくださいというようなスタンスなのだと思います。

臨床宗教師・臨床仏教師の発足

現代社会というのはあまりにも多様化し、かつ、それぞれの領域が高度化してしまいましたので、様々な高度な専門職者が成立しているのだと思います。実際に、私たち宗教者、仏教者も、基本的には現代の社会の中で、様々な事例に接しなければならぬような状況に追い込まれていると思います。ですから、現実の社会の中で、様々な例に接したときに、適切に対応できることが望まれます。そこで登場してきましたものが、臨床宗教師や臨床仏教師です。

背景は、どちらもほとんど同じです。社会の複雑化、多様化に伴ない、様々な事例が登場しています。特に人間の死や、罪を犯した人が刑務所に収監されていますけれども、その人たちに接して様々な話をしていく教職師の役割とか、いろいろあると思いますが、そういう場に、突然私たちがボンと出されても、現実にはほとんど対応できないことの方が多いのではないかと思います。ですから、様々な勉強しなければいけないという立場に、現在、私たちは追い込まれているのではないかと思います。

臨床宗教師のきっかけというのは、東日本大震災でありました。ある医師の活動、これは後で紹介しますが、岡部健さんという先生がいらっしゃって、既に故人になってしまいましたが、この人が、社会の現場で、実際に看取りとか、親族を亡くしてしまった人たちの悲しみに対応できる宗教者が、存在してほしいというようなことを言われまして、それで出来上がっていきました。東北大学の宗教学研究室の中から、実践宗教学寄付講座として始まっています。鈴木岩弓先生、谷山洋三先生、高橋原先生の三人が頑張っておられます。

谷山洋三先生は東北大学の出身者で、若いときから少しご縁がありますが、最初、長岡のビハラー病棟に勤めていた経験をお持ちです。阪神・淡路大震災の後、グリーンケアの研究所が、たしか神戸の方にできるのですが、そこにも何年か勤めていらっしゃいました。そのあと東北大学に移っていきます。東日本大震災を経まして、東北の方たちを中心に実践宗教学寄付講座が出来上がって、ここで臨床宗教師という名称の資格を出すようになりました。

最初のきっかけを作りましたのは、岡部健先生です。戦後の日本では、宗教や死生観について語り、暗闇に降りていく道しるべを示すことのできる専門家が、死の現場からいなくなっていました。人が死に向かい合う現場に、医療者とチームを組んで入れる日本人の宗教性にふさわしい日本型チャプレンのような宗教者が必要であろうと考えてきましたと、こういうことを主張されたのが岡部先生です。これに受けて応えたのが東北大学の宗教学の先生方で、寄付講座として実践宗教学講座が始まりました。今日のお話の中で、この臨床宗教師の資格を持って活躍している方の具体的なお話も聞けることになります。

日本型チャプレンという言葉を使いましたが、これは実は西洋世界におけるチャプレンが発想のもとになっていたからです。キリスト教世界が中心なのですが、色々な宗教、信仰を持っていらいっしゃる方がいますので、その信仰に関係なく、死に瀕している人たちに対応のできる人たちをというので、死に向かう人たちの精神的なケアをする専門的な職業人で、特に教会等に所属しない人たちが、最初、チャプレンと呼ばれました。現実には、どういふところで、

そのような仕事に従事したかといいますと、最初は病院です。それから、アメリカの場合には、やはり戦争です。戦争における従軍牧師さんが、チャブレンの代表です。それから、刑務所における犯罪者の死、これは日本でも、同じですね。今、実際に皆様の中には、刑務所に戒師として入ってらっしゃる方、いらっしゃると思いますので、中には、もう体験してらっしゃると思います。軍隊や警察、消防、学校、医療機関、刑務所、組織キャンプ、結婚式場、ガレー船、これは特殊な例かもしれませんが、意外に死と隣り合わせの仕事が結構ありますね。そういう場で対応できる宗教者、しかも西洋世界の場合には、大きくはキリスト教に裏打ちされた信仰を持っている人たちが、このチャブレンになっていらっしゃいました。ムスリムの方で、ご自身の信仰に一番の基盤を持って、こういう仕事に就いている方もいらっしゃいます。

そして、日本で誕生しました臨床宗教師の場合には、ご自身が、どのような信仰的な背景を持っているかは、問わない形で始まりました。しかし、どちらかというと、若干キリスト教系の人たちが多く参加し、かつ仏教者の方たちも結構参加しています。最近では、半々ぐらいでしょうか。構成がどのようであったか詳しいことを聞いてないのですが、西洋型のチャブレンのようなものが、臨床宗教師として始まりました。

もう一つ重要なものとして始まったのが、こちらの臨床仏教師です。この臨床仏教師は、台湾の世界で先行していました。現実に病院等で亡くなっていく方たちの精神的なケアをするお坊さんたちが、ぜひとも必要だということを台湾の台湾芸術大学にいらっしゃった、釈恵敏先生という僧侶の方が主張され、台湾大学と協力して、そのような制度をスタートさせました。これが、日本の臨床仏教師が始まる前に存在しています。死につつある人々のケアに関わる僧侶の養成ということが台湾で始まり、この運動を参考にして、日本でも同じような精神的なケアがきちんとできる仏教者を育てようとの動きが生まれました。そのために動き始めたところが、青少年教化協議会の中の一つの研究所ですけれども、臨床仏教研究所というところでした。

こちらは何を強調しているかといいますと、座学よりも、実はワークショップや、実践研修を非常に重視しています。臨床仏教師を立ち上げた方は、実は神仁先生という方なのですが、この先生は大正大学で勉強をされておりました。ある時期は仏教研究者を目指して、インドに留学もなさっていました。神先生とは、インドに留学しているときに、インドでお会いしたことがありますして、その時の印象は、とても真面目な方という感じでした。神先生は、その頃から、「学問のための仏教ではなくて、社会に、現実に関与に立つ仏教者を目指したい」というようなことをおっしゃっていただいたのをよく覚えていますので、若いときの希望を実現されたのだなと思っています。

そのようなわけで、座学よりも、現実の体験の知を重視する立場を、臨床仏教師の方は取られました。ワークショップが四十時間、そして実践研修、OJTとよく言いますが、これが百時間以上です。ですから結構長いですね。つまり、臨床仏教師の場合は、現実に関与の中で死につつま、死に行く人々と接する時間をかなり長く持つて、本当にどのような場面に出ていっても、しっかり対応できるようにということ、第一義に考えて、その制度を作られました。ですので、臨床仏教師の方は、非常に資格を取るまでが厳しいです。現在まで、臨床仏教師として認定された方の数は、十一名ですか、非常に少ない人数ですね。

それに比べますと、臨床宗教師の方は、いろんな大学が今、講座を設けて、その有資格者を輩出しようとしています。ですので、それぞれ方針が、といいますか、強調点が違っています。東北大学さんの方は、社会的に認知させながら、その上で徐々にやっていくという意識が、多分あるのではないかと思います。でも、臨床仏教師さんの方は、とにかく社会の現場に出たときには、死につつまある方は、その人一人で、一期一会の世界です、ですから、そのところで、きちんと対応できなければいけない、ということはかなり強調して、そのプログラムを作られているのだということが、よく伝わってまいります。

臨床仏教師、これは、ホームページからの引用ですが、「臨床仏教師は、人生の生老病死にまつわる現代社会の苦

悩と向き合い、専門的な知識や実践経験をもとに行動する仏教者のことです。近年、社会での仏教者のあり方は再考されつつあります。同時に、貧困・自死・ひきこもりをはじめとした社会問題や、こころのケアに取り組む仏教者の姿が数多く目にされるようになりました。一方で、現場で活動する方々からは、仏教者の社会貢献活動について総合的・体系的に学ぶ機会が少なく、自らの信仰や信念を現場の中でどのように活かしていくべきなのかを模索しているといった声が挙がっています」ということを設立の趣旨の中に書いていらっしやいます。

チャプレンの場合は、相手の持つ宗教にこだわらないといっても、本人たちは、基本的にキリスト教者が多いのです。それから、日本の場合には、実は仏教信仰を持っている方たちが多いというところがありますので、それを基にして、でも、それを他者には強制しないということを確認しつつ、臨床仏教師という名称を使用するようになりました。推進母体は、公益財団法人臨床仏教研究所です。そして、先ほどお話ししましたが、資格はとても厳格なところであります。

仏教者と高度専門職者

これで、話の半分です。このあとは、仏教者にとって、そういう高度専門職者としての意識を持ったうえで、何が社会に対してできるのかという点から、少し考えていきたいと思います。結局、仏教者とは何かです。これは古くて新しい、いつも問われる問題だと思えますが、仏の教えを実践し、他者に伝えていくということが、やっぱり仏教者にとっては、一番大事なことではないかと思えます。

二つの視点として書きましたのは、仏教の伝統は、私は行と学というのが、一番分かりやすいのではないかと考えています。ガンタドゥラとヴィパッサナードゥラという言葉がパールの聖典の中にありまして、教えに責任を持つ者と修行の行・観察というように訳しましたが、観察に責任を持つ者、この二つが仏教者の中には見られるようになって

ていきます。ですから、仏教の中には、二つの柱が立っていると考えていいと思います。一つは学問的な研鑽と、もう一つは自らの心を見つめていく、修行的な研鑽です。この二つが、やはり大事なのではないかと思います。

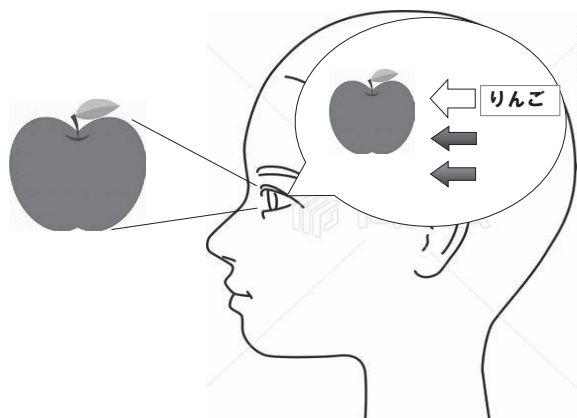
ところが日本の仏教は、とかく学問に流れがちです。日本の仏教は奈良時代に伝わってきますが、「学解の仏教」と言われることが多いように思います。やはり学問的な勉強をすること、經典や論書を読むことが仏教の勉強だ、そこに出てくる思想を理解することが、仏教の勉強であるというように考えている人たちが多いような気がするのですが、実は、古い奈良朝期の資料の中には、「学問は経論の修学、行は止観の実践」というような内容が書かれている資料があります。行の実践というのは、やはり止と観です。①心の働きを静めていくということと、②心の働きを対象化して気づいていくこと、です。なぜこのような観察の体系ができたのかといいますと、それは悩み、苦しみを克服していく具体的な方法として、インド世界に伝わっていた心の観察方法を、お釈迦様は継承しながら、新たな観察のしかたに気がついて、それが悩み、苦しみを超える方法になるということをはっきりと感じ取られたからだと思います。ですから、観というのは、実は非常に大切な心の観察のしかたです。

心による世界の認識

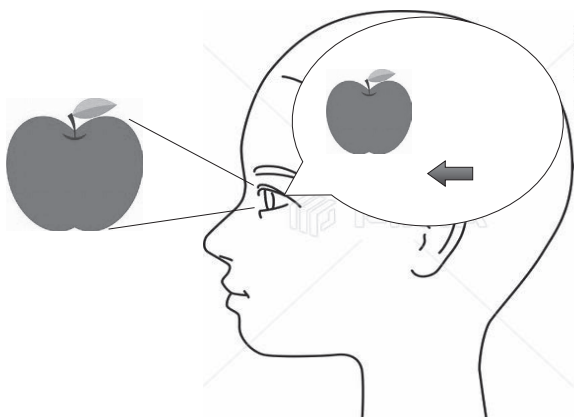
まず①と②というようにいいましたが、心のありようというものをまず認識します。そして、悩み、苦しみを超えていくためには、どうしたらいいかというと、今の瞬間、瞬間に、私たちの心身に起きているものを、ただ気づくだけでよいというように示されました。これは、四諦の苦集滅道と同じでありまして、私たちの認識がどういうものなのかということを示して、その示された認識の現実から、悩み、苦しみが起きている。では、どのようにすれば、違った世界に行けるか、価値観に到達できるか、ということを示したのだと思います。

私たちの普通の認識というものを考えたいと思いますが、目の前にあるのは、リンゴのつもりです。葉っぱがつい

私たちの普通の認識



観の観察によって生じる状態



ていて赤い実ですから、リンゴだと思えますが、リンゴが、目という感覚器官を通じまして、次に、脳の中に観察の対象としてのリンゴのイメージが出来上がります。このイメージに対して、私たちは、見た瞬間に、必ずと言っていいほど、「あ、リンゴ」という名詞、名称が付きまします。像を描き出していく際にも、そのあとに矢印が三本くつついていますが、これもしっかり意味がありまして、言葉が、すぐにくつつきます。私たちは、認識をするとき

に、パッとものを見たら、すぐに名称をつけるという、習性のようなものが存在しています。机や椅子だとか、いろいろと、ものをパッと見たら、あつという間に心は働きを起こしまして、判断を起こします。

ところが、この判断を表す前に、実はもう二つほど私たちの認識の中には存在しているものがあるようなのです。赤の矢印で描いたものは、実は分別の機能です。他のものと区別立てするのです。パッと私たちはものを見たら、それが他と別のものである、他のものとは離れたものであるということを、知らず知らずのうちに、一瞬のうちに、気づいています。

例えば、私がこの演台の上にペットボトルを置いてみます。そうしたら皆さん、もうパッと見た瞬間に、ペットボトルが演台の上に載って、ペットボトルと演台は別々のものだという認識が、すでに生じているのです。これを機械に認識させると、形はちゃんと取るのですが、この演台とペットボトルが別物だということの判断をすることがなかなか難しいのだそうです。私たちは、こうなりますと、これは手に取れるものだと思うますね。でもこれ、もし接着剤でくっついていたら、取れないですね。それはいいとしまして、一体化して捉えてしまう最初の認識が、ほんとには存在しているのです。それは多分、色と形だけ、これを表したものが緑の線です。ですから、私たちの認識というのは、三層構造ぐらいで考えると、一番分かりやすいのではないかと思っています。パッと見た瞬間に、実は色と形だけが見えて、かつ、すぐ他のものと区別し、そしてすぐ「リングー」というような感じで判断が入ります、この三つが常に起きているのが、私たちが世界を認識するときの在り方です。

ヴィパッサナー、観という名前前で呼ばれている観察ですが、この観と呼ばれる観察をすることによって、どういう事態が生じてくるのかといいますと、実は私たちの世界が、自分の心が作り出した判断、了別にしかすぎない。かつ、いろいろなものを区別立てしているのだということにも、気がつけるようになっていきます。実際に、観の観察でやっていることは何かといいますと、対象を一つ一つ気づいていくことをやるのですが、この気づきのときに、

実は大事な点があります。それは言葉が入って気づいているか、言葉が入らないで気づいているか、なのです。この言葉が入る気づき方というのは、一般に、念という名前で呼ばれる気づき方の方です。今、マインドフルネスでは、あまり言っていないようなのですが、ヴィパッサナーを紹介した東南アジア系のお坊さんたちの中に、とにかくサティが大事だ、念が大事だということを強調している人がいらつしやると思いますが、そのサティ、確かに大事なのです。でもサティは、気づけるようになっていく最初のときに、きちんとやればいいことでありまして、大事なものは、その対象を、言葉を使わないで気づく心の働きの方です。この働きをちゃんと認識できるようになるのが、修行のヴィパッサナーの中では、一番のポイントになると思います。

観察時の大切な点

その観察の対象は、自分の身体の動きでも、心に生じた何かでもかまいませんが、それを捕まえる心の働きが大切です。その捕まえる心の働きは、実際には、気づくとしか言いようがないという感じなのですが、別の表現ですと、注意を振り向けるというような感じでもいいです。一番実感しやすいのは、やはり歩く観察をすることでしよう。実際に足を上げたときに、上げると心の中で確認して、下ろしたときには下ろすで、心の中で確認する。このようにしていますと、実際の動きを捉えている心の動きと言葉というものが両方とも起きて、言葉でも確認していることになります。上げる、下ろす、上げる、下ろす、このようなときに、自分の動きをきちんと捕まえる心の働きも、一緒に起きてきます。ですから、言葉がなくても、自分の動きをちゃんと捕まえる心の働きが生じます。これが、しっかりと自分なりに分かるようになります。

この言葉を使わないで気づいている働きの方が、パーリ語の經典の中の言葉ですと、サンパジャニヤという言葉が出てきます。パジャニヤというのはブラジュナと関連する言葉です。これをそのまま一度パーリ語の名詞形に変

化させますと、パンニヤですので、般若に近くなるのですね。パジャンニヤは般若と全く同じかというと、微妙に違うみたいですが、私たちが対象を気づいているときに、実は言葉を介さないで、ちゃんと気づく心の働きがあって、これをきちんと起こしていきましょうというように言っているのだと思います。これができて、一つ一つの対象を、例えば立っているときですと、自分の立っている姿勢が気づけますから、その自分の姿勢を、言葉を使わないでちゃんと気づきます。あるいは呼吸していますから、呼吸の入る、出るというのを気づくことができますね。それから、また音もすぐ入ってきますから、音も気づきの対象とすることができます。

このように、気づきの対象を複数のものにして、どんどん増やしていきます。そうすると、どういう事態が生じることかというと、私たちの心は、やっぱりある容量の限界があるみたいでして、ある段階まで来ると、その気づくことが対象を捕まえている心の働きと気づいている心の働きとで、容量オーバーになるようです。その容量オーバーになると、どのような事態が生じるかというと、リングだとか、他者と区別している分別の働きの両方がなくなると、ただ色と形だけの世界が見えてくるのだと思います。この状態が、恐らく大乘の世界の用語ですけれども、無分別の世界と言われるのだと思います。分別がなくなっているのですが、外界は認識していますから、音は聞こえているけれども、判断がない。ものは見えているけれども、その判断がないので、色と形だけが見えているというような言い方がされます。

この状態を経験すると、色と形だけの世界は、実は自分が手を挙げると、世界と私がつながっているように感じられると言います。その世界と私がつながっているところから、私と他者の区別がなくなる世界が体感できる。そうすると、他者に対するものの見方が、やはり変わってくるといいます。これは、とても大事な世界なのではないかと思えます。気がつくときには、言葉の働きが存在している場合と、言葉の働きが存在していない場合とがある。気づくことに言葉を介在させないで、しかも、はっきりと気づいていくということが大事ですね。

これできてくると、実は、私たちの心というのは、世界を認識して、その認識がきっかけになって、様々な悩み、苦しみを起こしていることに、自然と気づけるようになってきます。何かあって、あれこれと悩んでしまつて、マインドワンダリングとよく言いますが、次から次へといろんな考え方が出てきてしまつて、悩んでいる人、ノイローゼになっている人たち、いらつしやると思います。でも、そういう方々の中には、自分の呼吸を観察してもらつていきたいと思います。そうして、呼吸の方に自分の心が結びついていきますと、他の考え方が生じないように変わっていきます。これによって、やがて次第、次第に自分の心が静かになっていって、その悩みから逃れるということができるようになってきます。「およそ苦しみが生ずるのは、全て識別作用によって起こるのである。」これが判断、了別ですね。「識別作用が消滅するならば、もはや苦しみが生起することはない。」

社会に対する役割

このように考えていきますと、私たちが社会に対する働きかけとしては、やはり仏教の持っていた価値観、悩み、苦しみを超える手立てを提供することができるといのが大事なのだと思います。もともと最初は、相手の話をきちんと聞いてあげる、傾聴が大事なことは言うまでもありません。でも、傾聴の後に問われることが出てきますから、そのときに、「いや、実は仏教では、こういうようにして、悩み、苦しみを超えているのですよ」というようなことが、身をもって示せるというのが大事なのではないかと思ひます。

例えば身内が亡くなって、悲しみに打ちひしがれている人がいた場合に、「お題目を唱えなさい」という指導、あると思うのですが、これは非常に理にかなっています。一つのものに専心していると、他の働きが起きなくなってくるからです。ですから、お題目を一生懸命唱えなさいというように指導することで、その方が一生懸命唱えていれば、次第、次第に悲しみの気持ちが生じないように、自分の心が変わってきます。平安を目指すときには、ゆっくり唱え

ることが大事なのですが、しかし一つのものに専心することで、他の働きが起きないという原則を意識して、きちんと唱えていけば、お題目が持つている力のようなものを、自覚することができるのではないかと思います。

それから、もう一つは慈悲です。「智慧」と「慈悲」という言い方、よくされますけども、他者への慈しみ、自己中心性を放れていく、これは実際の修行の中からも、実感されるようになっていきますし、また自らそのような働きかけていくことによって、自分のものになってくると思います。

高度な専門職者は、そういう役割を、社会の中で、自分の言葉で語れるというのが大事です。その場合には、問題発見、本質追求、自己解決なのですが、生涯にわたって学んでいくということも大事になると思います。今、日本の仏教界のいろんな宗派で問題になっているのは、継続教育がなかなかできていないことです。実は、諸外国の仏教界の中では、結構やっているところが、もうすでに存在しています。韓国の曹溪宗などは、意外にしっかりとやっています。仏教者らしくという点では、やはり仏教的な価値観の智慧と慈悲を真正面に出していくことが一番だと思います。

最後に

最後になりますが、世界で積極的に活躍している仏教者に、ダライ・ラマさんとか、ティクナット・ハンさんがいますが、特に、ティクナット・ハンさんが興味深いと思います。仏教者として、自らの心をきちんと整えることができていて、それによって、社会の中で関われる部分というのは、心のケアだとか、紛争の解決だとか、そういう点ではないかということ正面切って言っていらいっしゃるのです。また、最近では、チベットのお坊さんたちで、随分元気のいい方が出てきていますね。ゾンサル・ケンツェ・リンポチェさんとか、ツルティム・ロドゥさんという人が有名になります。

最後になりました。宗教者の役割が、今、再認識されつつありますので、やはり何が一番大事かということを、また皆さんと一緒に考えていければいいなと思っております。